

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25360029

研究課題名(和文) 中国東北部における韓国系独立運動関連史跡の観光地化に関する研究

研究課題名(英文) Study on Korean Tourism of Historical Sites Related to the Korean Independence Movement in Northeast China

研究代表者

佐々 充昭 (Sassa, Mitsuaki)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：50411137

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：1992年中韓外交正常化の後、中韓の歴史学者を中心に中国内にある韓国系独立運動関連史跡に関する調査が行われた。その後、中韓関係の緊密化により、それらの中の重要なものが韓国系資本によって整備・復元された。特に中国東北部には数多くの関連史跡が存在し、それらは今や多くの韓国人旅行者たちが訪れる有名な観光地となっている。またこの地域は、高句麗の帰属をめぐって中韓間で歴史認識論争が行われている場所でもある。本研究では、中韓間で先鋭化している歴史認識論争や中国内の朝鮮族コミュニティの動向と関連づけながら、中国東北部において観光地化が進んでいる韓国系独立運動関連史跡の実態について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Since the normalization of diplomatic relations between China and South Korea in 1992, investigations of historical sites related to the Korean Independence Movement in China have been carried out by researchers of Chinese and Korean history. As the relationship between China and South Korea has grown closer, many of these important sites have been restored through South Korean capital. In particular, there are many related historical sites in Northeast China, which have become popular Korean tourist destinations in recent years. This region is the territory of Koguryo, one of the ancient Korean kingdoms; Chinese and Korean people have disputed to which nation the Koguryo belong. This study examines the trends of Koreans in China, considering the historical controversy between China and South Korea, as well as clarifying the current state of these historical sites related to the Korean Independence Movement in Northeast China, which have become tourist attractions.

研究分野：朝鮮近代史

キーワード：朝鮮の抗日民族独立運動 中国東北部 観光地化 延辺朝鮮族 東北工程 高句麗 青山里戦闘 金佐鎮將軍記念事業会

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究を着想するに至った経緯

1992年の中韓外交正常化の後、中韓両国は戦略的協力パートナーシップ関係を結び、様々な分野で相互交流を深めつつある。研究代表者はこれまで植民地期朝鮮の民族独立運動に関する研究を行って来たが、このような近年の国際情勢に鑑み、朝鮮近代における民族独立運動の在り方を「東アジア」というより広い視点から捉えなおす研究に取り組んでいる。その一環として、平成22年～24年度科研(C)「東アジア三国における近代的『民族』概念の創出と『民族主義』創成に関する比較研究」を通じて、朝鮮近代における民族主義形成の問題を「東アジア」という枠組みの中で分析する研究を行った。また2011年9月から2012年3月まで訪問研究者として中国人民大学で学外研究を行い、中国近現代の民族主義思想(特に「国学 National Studies」)に関する研究を行った。

この中国滞在中に、研究代表者は中国各地に存在する韓国系民族独立運動関連史跡の調査を行い、それらのうち重要なものが有名な観光地となっている事実を知った。また研究代表者は、立命館大学の基盤研究(課題名「中国『東北工程』をめぐる韓中間の歴史認識摩擦に関する研究」2009年度)を通じて、中国側が推進した「東北工程」プロジェクトを契機に、高句麗の帰属をめぐる中韓間で歴史認識論争が展開されている事実について考察した。本研究は、中国東北部における韓国系民族独立運動関連史跡において、中韓間で問題となっている歴史認識論争がどのような影響を与えているのかという問題意識から着想されたものである。

(2) 先行研究の動向と本研究の位置づけ

韓国では、近年、歴史学者たちを中心に中国内での現地調査が盛んに進められている。その代表的な成果として、朴烜(元韓国民族運動史学会会長)『満州地域韓人遺蹟踏査記(改訂版)』(ソウル・国学資料院、2012)等がある。中国では、主に朝鮮族の研究者たちによって、朝鮮族社会の形成に関する歴史学研究の中で抗日独立運動に関する研究が行われている。代表的なものとして、孫春日(延辺大学教授)の『中国朝鮮族移民史』(北京・中華書局、2009)等があげられる。これら韓国と中国における研究は、抗日独立運動史そのものに関する研究であり、その史跡地の観光地化をめぐる問題にまで議論が及んでいない。

一方、本研究に関連する研究としては、真鍋祐子「アイデンティティ・ポリティクスとしてのツーリズム - 中国東北部における韓国のパッケージ・ツアーの事例から」(『文化人類学』74(1)2009)があげられる。真鍋の研究は、文化人類学の観点から、新たなる「伝統の創造」として現代韓国の観光戦略を論じようとしたものであり、主に韓国側の視

点を重点的に扱ったものである。これに対して、本研究では、韓国側だけでなく、中国側の対応を同時に考慮に入れながら、特に中韓間で懸案となっている歴史認識論争や中韓間で架橋者としての役割を果たしている朝鮮族コミュニティの動向という分析視点を設定した上で、関連史跡の観光地化の動向について考察を行うものである。

2. 研究の目的

1910年の韓国併合後、朝鮮の民族独立運動家の多くは中国東北部へ渡り抗日独立運動を展開した。1992年に中韓の国交が樹立した後、その中の重要なものが韓国系資本によって整備・復元され、中国側当局の管理のもとに維持・運営が行われている。近年、中国を訪問する韓国人観光客が増加を続ける中、それらは今や多くの韓国人旅行者が訪れる有名な観光地となっている。

その一方で、この地域は、中韓間で歴史認識をめぐる問題が発生している場所でもある。19世紀後半、清朝による封禁政策の撤廃によって豆満江北岸の「間島」と呼ばれる地域に朝鮮人が多数移住するようになった。この地域の領有権をめくり、19世紀末から中韓間で紛争が起こった。その後、1905年に朝鮮を保護国とした日本が1909年に間島協約を締結して、間島の領有権を清側に認めた。1949年に中華人民共和国が成立した後、間島の地は延辺朝鮮族自治州となったが、韓国側には「この場所はもともと我が民族が領有していた土地である」と考える者が多くいる。さらに、近年、中国と韓国との間でこの地域をめぐる歴史認識論争が起こっている。中国では、2002年から2007年までの5年間にわたって「東北边疆歴史与現状系列研究工程」(「東北工程」という研究プロジェクトが推進された。これにより、高句麗は「中国边疆少数民族の地方政権」として中国史に属するものと見なされた。これに対して、韓国側では官民をあげた一大反対運動が巻き起こった。「東北工程」はすでに終了したが、高句麗の帰属をめぐる歴史認識論争は、「間島」をめぐる領土問題と合わせて、中韓間で未解決の問題としてくすぶり続けている。

本研究では、このような地域性をもつ中国東北部において韓国系民族独立運動関連史跡がどのような形で観光地化されているのか、その実態について明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 研究の前提

本研究では、中国東北部にある韓国系民族独立運動関連史跡を対象として、文献調査と現地調査の二方面から研究を行う。中国内で展開された抗日独立運動に関しては、大韓民国(韓国)と朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)で異なる評価を下している。韓国側では、1920年4月に上海で創設された大韓民国臨時政府やそれに連なる右派民族主義勢力が展

開した抗日闘争を民族独立運動の主流と見なしている。一方、北朝鮮側では、1930年代以降に金日成が活躍した左派系統のパルチザン闘争を抗日独立運動の中心と見なしている。本研究では、韓国系資本によって整備・復元され韓国人観光客たちが多数訪れる右派民族主義系列の抗日独立運動史跡地を主な研究対象とする。

(2) 文献調査について

文献調査に関しては、日本語・朝鮮語(韓国語)・中国語の資料を幅広く収集し、中国東北部で展開された抗日独立運動に関する史実を実証的な立場から正確に把握する。さらに、現代の韓国において、それら抗日独立運動に関連する事蹟がどのように顕彰されているのか検証を行う。また、中国国内で展開された抗日独立運動は朝鮮人と中国人との強い連帯関係のもとに行われたものであった。まず歴史資料を通じて、中国と朝鮮の抗日運動家たちの間にどのような交流関係があったのか明らかにする。その他、「東北工程」の研究成果に関する文献調査を通じて、同プロジェクトを契機に発生した中韓間の歴史認識摩擦が、中国東北部における韓国系独立運動史跡の観光地化に関してどのような影響を与えているのか明らかにする。

(3) 現地調査について

現地調査に関しては、大きく次の3つの史跡・地域に分けて調査を行う。第1は、吉林省延辺朝鮮族自治州内にある旧朝鮮人僑民関連史跡であり、特に延吉市内にある大成学校・明東村・尹東柱関連史跡等の調査を行う。第2は、安重根に関連する史跡であり、大連市の旧旅順監獄舎跡地やハルビン市内の安重根義士記念館の調査を行う。第3は、青山里戦闘及び金佐鎮関連の史跡であり、延辺にある青山里大捷記念碑や黒龍江省内に設けられた金佐鎮將軍記念館の調査を行う。

中国内にある韓国系独立運動史跡は、韓国の民族独立運動関連団体(光復会・遺族会・国家報勲処・独立記念館)や民間団体が主体となって整備・復元が行われ、現地の朝鮮族の協力支援のもと、中国側当局の管理によって維持・運営が行われている。現地調査に際しては、韓国側による史跡の調査・整備・復元の過程と、中国側当局による運営・管理方法について調査を行う。また、韓国人旅行者や現地の中国人・朝鮮族関係者たちから聞き取り調査を行い、関連史跡の観光地化をめぐる実態について明らかにする。

4. 研究成果

(1) 文献調査の成果

1910年代に中国へ亡命した朴殷植の抗日独立運動に関する研究を行い、「高句麗が領有した疆域は朝鮮民族の故土である」とする言説が歴史的にどのように形成されたのか明らかにした(論文)。また、1920年代に

中国内で活動した朝鮮の抗日独立運動家たちの中に、中国人アナーキストの影響を受けて無政府主義に傾倒する者がいることを見出し、その代表的な事例として趙素昂(韓国独立党の代表格であり後に大韓民国建国綱領を構想した人物)が提唱したアナーキズム思想に関する研究を行った(論文)。さらに、旧満州国に関する文献調査を通じて、帝国日本の大アジア主義思想と伝統的な儒教思想を融合させた大同思想が、中国人・朝鮮人を満州国行政に協力させるイデオロギーとして機能していた事実を明らかにした(論文)。

その他、青山里戦闘に関する文献調査を集中的に行った。その結果、青山里戦闘において主力部隊を担った北路軍政署(大韓軍政署)の構成員の大半が大倭教徒であり、北路軍政署の総裁も徐一という大倭教幹部がつとめた事実について明らかにした(論文)。日本軍との戦闘に際して、大倭教徒たちはロシア革命派から近代兵器を購入し運搬する役割を果たした事実について明らかにした(論文)。さらに、解放後に唱導された大韓民国の右派民族主義言説によって、朝鮮側の戦果が過度に強調されていった事実や、特に近年、金佐鎮將軍の後孫たちが青山里戦闘関連史跡の顕彰事業を行う中で、青山里戦闘において大倭教が果たした役割が看過され、その代わり、金佐鎮將軍の業績が過度に強調されている事実について論じた(論文)。

(2) 現地調査の成果

延辺朝鮮族自治州内の史跡

近年、延辺朝鮮族自治州内にある旧朝鮮人僑民関連史跡のうち重要なものが復元され、毎年多くの韓国人旅行者が訪れている。研究代表者は2013年8月に同地の現地調査を行った。調査した史跡は以下の通りである(括弧内は現在の所在地)。<延吉市>墾民会本部跡地(吉林辺務督辦公署)、延吉監獄抗日闘争記念碑(延吉市延辺芸術劇場)、一松亭、明東村遺跡地・尹東柱生家旧址、尹東柱墓地、旧大成中学校内の尹東柱記念館と李相高記念館、<龍井市>旧間島旧日本総領事館(龍井市人民政府庁舎)、龍井地名起源之井泉碑(巨龍友好公園)、瑞甸書塾跡地記念碑と李相高亭(龍井市朝鮮族実験小学校)、<和龍市>三・一三反日義士陵、反日志士墓域、青山里抗日大捷記念碑

この現地調査を通じて以下の事実が明らかとなった。延辺朝鮮族自治州は現在、8つの行政区域(6つの市と2つの県)で構成されているが、その中で延吉市・龍井市・和龍市にある史跡が整備されている。この三つの市のうち、かつて朝鮮人が集住した地域は龍井市であった。一方、延吉市は中国政府の行政機関が置かれた場所であり、中国人が多数居住した。本来なら龍井市に朝鮮僑民関連の史跡が多数存在するはずであるが、この地は自治州の州都である延吉市から距離的に離

れているために史跡の整備があまり行われていない。朝鮮族実験小学校横に瑞甸書塾跡地記念碑と李相高亭が建てられているが、現在は管理が行き届かず荒れ果てた状態となっている。一方、延吉市内には明東村遺跡地・尹東柱生家旧址・旧大成中学校の尹東柱記念館などが整備され、建物の復元が行われている。これは韓国側の事情によるものと考えられる。韓国人旅行者は、夏期に4~5日程度の団体ツアーを利用して同地を訪れる。その際、白頭山と高句麗遺跡の観光を同時に楽しむために、時間的余裕がなくなり、延吉内では州都である延吉市内にしか滞在することができない。また、ちょうど延吉市内には詩人・尹東柱の生家及び彼の通った教会や学校が存在する。地元観光業の発展を企図した朝鮮族の斡旋・協力により、尹東柱関連史跡の整備のために韓国からの資本が集中投下された。このようにして復元された尹東柱関連史跡は、現在、韓国からの団体旅行ツアーに必ず組み込まれるようになっている。一方、和龍市は、日本側官憲の監視の目が届かなかった地域であり、武装した抗日独立団体の根拠地が多数置かれていた。この地は1920年に青山里戦闘が戦われた場所でもあり、その跡地には青山里大捷記念碑が建てられている。しかし、この地域は白頭山北麓にある辺鄙な農村地帯であり、延吉市から距離的に遠く離れているために、一般旅行者の訪問が困難な状態となっている。

安重根関連の史跡

現在、中国内には二つの安重根関連史跡が存在する。一つは黒龍江省のハルビン駅構内に設けられた安重根義士記念館である。この記念館はもともと朝鮮族が管理する朝鮮民族芸術館という建物内にあり、朝鮮族民俗博物館と併設されていた。その後、2013年6月に韓国の朴槿恵大統領が訪中した際、伊藤博文を暗殺した現場であるハルビン駅に安重根の石碑を建立しようと習近平主席に提案した。これが契機となり、2014年1月にハルビン駅構内に安重根記念館が開館した。研究代表者は2013年8月に同記念館の調査を行った。同館への訪問者はほとんどが韓国人旅行者であり、中国人の入館者はなかった。同駅を利用する中国人に尋ねてみると、駅構内にこのような記念館が設けられていることを知る者もいなかった。このことから現地の中国人は同記念館に関する関心が極めて希薄であることが確認できた。

また、安重根が収監され処刑された場所である旅順監獄舎跡地（大連市）は、現在、旅順日俄監獄旧址と呼ばれ、歴史記念博物館となっている。特に安重根が死刑宣告された場所は、旅順日本関東法院旧址陳列館として、安重根関連の遺物や彼の東洋平和論などに関する展示がなされている。そこでは安重根の義挙を顕彰する形の展示がなされており、「中国と韓国は日本帝国主義の共通の被害

者である」という歴史認識を確認するための場所となっている。またこの監獄は、朝鮮を代表する抗日独立運動家たちが多数収監され獄死した場所でもあり、彼らを称えた国際抗日烈士展示館が設けられている。朝鮮を代表する民族主義史学者である申采浩が収監され獄死した場所として、申采浩関連の展示もなされていた。その傍らで、帝国日本の中国侵攻の際に犠牲となった中国の革命運動家たちに対しても、中国共産主義革命の土台となった「烈士」として顕彰が行われていた。日本帝国主義に対して、中国の革命家と韓国の独立運動家たちは共に抗日戦争を戦った「反植民地主義、反帝国主義」の同志としてその事蹟が称えられていた。その顕彰の仕方は、国際抗日烈士展示館という名称に端的にあらわれている。

一方、大連市の近郊にある旅順は日露戦争における最大の激戦地であり、「203高地」「東鶏冠山」などの戦跡地は多くの日本人が訪れる観光地となっている。旅順口区には、日本の満州戦跡保存会が建てた戦勝記念碑や旅順日露戦争陳列館などがあり、大連市内にも満鉄旧址陳列館などの記念博物館がある。日本からの観光客は、主にこれらの史跡地を巡り、旅順日俄監獄旧址にまで足を運ぶ者はほとんどおらず、むしろ忌避する傾向が見られた。これは旅順日俄監獄旧址を大連市におけるメインの観光地とする韓国人旅行者たちの行動とは大きく異なるものであった。一方、中国国内の一般の中国人旅行者たちは、日露戦争関連の史跡地も旅順日俄監獄旧址も共に大連市の歴史を辿る史跡地として訪問していることが確認できた。

青山里戦闘及び金佐鎮関連史跡

1920年10月に白頭山北麓の青山里付近で朝鮮の抗日武装集団と日本軍との間で大規模な戦いが起こった。現在の韓国では、この戦闘を抗日独立戦争史上最大の戦果を収めた戦いと評価し、青山里大捷（大捷は大勝利という意味）と称している。韓国の光復会は、青山里戦闘80周年を記念して、2001年その現場（延辺朝鮮自治州和龍市青山村）に「青山里大捷記念碑」を建立した。また、朝鮮独立軍の総司令官として青山里戦闘を指揮した金佐鎮将軍に関する史跡も、近年大々的に整備が進められている。この事業を推進している団体が、1999年に設立された社団法人金佐鎮将軍記念事業会である。同事業会は、韓国の国家報勲処の後援を受けながら、かつて金佐鎮が生活していた場所（中国黒龍江省）に韓中友誼公園や中韓友誼広場という施設を建設した。研究代表者は、2013年8月に青山里大捷記念碑の調査を行い、2014年7月に黒龍江省の韓中友誼公園と中韓友誼広場の調査を行った。韓中友誼公園は黒龍江省の海林市にあり2007年に完成した。4万余坪の敷地内に中央公園と2階建ての大きな白冶金佐鎮将軍記念館（抗日武装闘争歴史館）が建て

られている。一方、中韓友誼広場は黒龍江省の山市鎮にあり 2010 年に完成した。山市鎮は金佐鎮が実際に生活していた場所であり、また 1930 年に共産主義者によって暗殺された場所でもある。同広場は「金佐鎮將軍殉国地」と称され、敷地内の中心に金佐鎮將軍の銅像が建てられ、その周囲に当時の住宅、会議室、井戸、殺害場所である金星精米所などが復元されている。

これら青山里戦闘に関連する史跡地の顕彰は、韓国ナショナリズムを前面に押し出したものとなっており、韓国系独立運動関連史跡の観光地化をめぐる諸問題が集約されている。これに関して研究代表者は、「東北アジアの歴史記憶とツーリズム - 中国内における金佐鎮將軍記念事業会の活動をめぐって」論文) を発表した。この論文で以下の事実について明らかにした。金佐鎮將軍記念事業会は、金佐鎮の孫娘（金佐鎮の息子の政治家・金斗漢の娘）である金乙東（キム・ウルドン：1945 年生）を中心に組織されたものである。金乙東は女優業の傍らで政治家としても活躍し、2008 年第 18 代総選挙で国会議員に初当選した後、親朴権恵派の議員として活躍し、2014 年 7 月から 2016 年 4 月まで与党セヌリ党の党最高委員 4 人のうちの一人として活躍した。また、金乙東の息子である俳優の宋一国（ソン・イルグク：1971 年生）も同事業会を様々な面で支援している。宋一国は、中国の「東北工程」に対抗するために制作された高句麗ドラマの先駆けとなった『朱蒙』において主演をつとめた俳優である。黒龍江省内に建てられた金佐鎮將軍関連施設は、この親子の政治力と経済力によって建設された。特に同事業会は青少年愛国体験プログラムと銘打って、毎年「青山里歴史大長征」ツアーを実施している。このツアーは、韓国の大学生を対象に夏休み期間中 10 日間ほどの日程で毎年行われており、同事業会が建設した金佐鎮將軍関連施設の他、青山里大捷記念碑などの抗日独立運動史跡地や高句麗の遺跡等を巡るものである。この旅行ツアーでは、青山里戦闘における朝鮮独立軍側の戦果を過度に誇張する喧伝が行われている他、中国側の「東北工程」に対抗するために、高句麗は朝鮮民族の歴史であり、中国東北部はもととも朝鮮民族の故土であるとする歴史観が唱道されている。これに対して、中国側は施設名称に「中韓友誼」などの語を付させて韓国ナショナリズムの要素を払拭し、また施設を一般の中国人には開放せず、韓国からの旅行者のみに限定するなどの規制をかけて管理・維持を行っている。

(3) 調査結果のまとめと今後の展望

韓国側が抗日民族独立運動の史跡を整備しようとする目的は、植民地支配という困難な時代に行われた抗日独立闘争の偉業を顕彰し、その跡地を歴史文化遺産として保存するためである。一方、中国側も中韓間の友

好・親善を促進するためにこれを許可している。特に 2000 年以降、独島/竹島問題や従軍慰安婦問題をめぐって日本と韓国が鋭く対立する時代状況の中で、中国内の韓国系民族独立運動関連史跡は「反日」を訴えるための中韓連帯の歴史拠点としての役割を担うものとなった。また、中国東北部は、中国内で相対的に経済開発が遅れた辺境地域である。中国政府が、同地域における韓国系民族独立運動関連史跡の整備・復元を許可し、その観光地化を認めているのも、韓国資本の導入によって同地域の経済発展を図ろうとするためであると考えられる。また、この地域は中国朝鮮族が多数集住する地域でもある。中国政府は、韓国人対象の重要な観光地である同地での史跡整備・開発に朝鮮族を積極的に関与させ、そのことにより経済的に遅れた東北部の地域振興、特に観光産業の活性化を図ろうとしているものと思われる。

しかしながら、過剰とも言える韓国ナショナリズムが中国内に流入することに対して、中国政府は非常に神経を尖らせているようにも見受けられる。特に中国側の「東北工程」を契機に、2007 年頃から中国と韓国の間では歴史認識論争が発生している。これ以降、中国東北部における韓国系独立運動関連史跡は、中国側の「東北工程」に対抗する性格を持つものにもなっている。それらは本来、日本の帝国主義支配を批判するための歴史拠点として整備されたものであったが、「東北工程」による中華主義との対決という状況の中で、对中国ナショナリズムとしての性格を帯び始めている。このような傾向は、金佐鎮將軍記念事業会が推進する各種史跡の整備事業に端的に見てとれる。特に同事業会が毎年行っている「青山里歴史大長征」ツアーでは、かつて朝鮮民族は中国東北部全域を領有したという所謂「大朝鮮主義史観」が鼓吹されている。このような歴史観は、韓国系独立運動関連史跡が復元されている場所において、程度の差はあれ、潜在的に共通して見られるものである。そればかりではなく、朝鮮族社会に韓国資本が流れ込む過程で、朝鮮族同胞たちの間にも少なからず流入がみられる。

19 世紀以来、中朝間には「間島」をめぐる領有権紛争があったことを考えると、この問題は深刻である。周知の通り、中国は各地に民族独立問題を抱えており、とりわけ新疆ウイグル・チベット・内モンゴルなどの分離・独立の動きに対して厳しい措置をとっている。現在、朝鮮半島は南北に分断され、北朝鮮というクッションが存在するが、もし朝鮮半島に強力な統一国家が出現すれば、国境を接する「飛び地」の延辺朝鮮族自治州は「統一朝鮮」との関係を一層深めることが予想される。このような朝鮮族の越境的なエスニック・アイデンティティの活性化は、民族問題を抱える中国政府にとって大きな不安要素になりかねない。今後、中国内に建設された

韓国系独立運動関連施設の中で韓国ナショナリズムがさらに高揚するならば、中国側はこれまでの政策を転換する可能性もあるだろう。実際、中国政府は一定の警戒心をもって韓国系独立運動関連施設の動向を注視しているようにうかがわれる。中国側は、朝鮮半島情勢を安定化させ中韓間の友好関係を維持するために、既存の韓国系独立運動関連施設を引き続き維持・管理しつつも、韓国側のナショナリスティックな歴史認識の唱導に対して牽制を加えつつ、その規模を徐々に縮小させるべく規制する方向に向かうことが予想される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

佐々充昭、「東北アジアの歴史記憶とナショナリズム - 中国内における金佐鎮將軍記念事業会の活動をめぐって」、『立命館大学人文科学研究所紀要』111号、査読無、2017年、87 - 122頁

佐々充昭、「青山里戦闘において大倭教が果たした役割 - ロシア革命派からの武器入手を中心に」、『朝鮮学報』242輯、査読有、2017年、1 - 36頁

佐々充昭、「北路軍政署の創設と大倭教 - 総裁・徐一の活動を中心に」、『立命館国際地域研究』45号、査読無、2017年、135 - 151頁

佐々充昭、「趙素昂の大同思想とアナキズム - 『六聖教』の構想と『韓薩任』の結成を中心に - 」(韓国語)、『韓国宗教』第40輯、査読無、2016年、221 - 246頁

佐々充昭、「近代日本の大アジア主義と大同思想 - 満州国の「王道主義」を中心に」、『韓国宗教』39輯、圓光大学宗教問題研究所、査読無、2016年、95 - 126頁

佐々充昭、「朝鮮時代における疫病流行と黄海道九月山三聖祠における檀君祭祀」、『桃山学院大学総合研究所紀要』39巻3号、査読無、2014年、241 - 259頁

佐々充昭、「一九一〇年代以降における朴殷植の民族独立運動と『国魂』論の提唱 - 大倭教との関係を中心に」、『朝鮮学報』228輯、査読有、2013年、91 - 128頁

[学会発表](計7件)

佐々充昭、「東アジア共同体形成のための文化的共通性は存在するのか? - 現代日本の韓日比較文化論を中心に」(韓国語)、『アジア共同体論』招聘講演、聖公会大学校(ソウル特別市・韓国)、2016年3月24日

佐々充昭、「近代日本の大アジア主義と大同思想 - 「満洲国」の王道主義を中心に」(韓国語)、『韓中日国際学術大会: グローバル時代韓国的価値と文明研究』、圓光

大学校(全羅北道益山市・韓国)、2015年10月23日

佐々充昭、「趙素昂の大同思想とアナキズム - 「六聖教」の構想と「韓薩任」の結成を中心に - 」(韓国語)、『グローバル時代韓国的価値と文明研究』第4次国際学術大会、圓光大学校宗山記念館(益山市・韓国)、2014年11月28日

佐々充昭、「韓国近代における檀君ナショナリズムの展開 - 李能和の朝鮮神教論を中心に - 」(韓国語)、『ソウル大学校宗教学科外国人著名学者招聘講演会、ソウル大学(ソウル市・韓国)、2014年9月22日

佐々充昭、「朝鮮近代史における<忘れられた>記憶 - 青山里戦闘における大倭教徒・徐一と金佐鎮の活動をめぐって」、『朝鮮史研究会関西西部会2014年度7月例会、朝鮮史研究会関西西部会大阪中津センタービル(大阪府・大阪市)、2014年7月26日

佐々充昭、「東アジアの歴史記憶とナショナリズム - 中国東北部における朝鮮民族独立運動関連史跡の保存をめぐって」、『グローバル化とアジアの観光研究会』、立命館大学人文科学研究所(京都府・京都市)、2013年12月7日

佐々充昭、「朝鮮近代における新宗教と国家神道との相克 - 植民地期の公共圏をめぐって」、『グローバル時代韓国的価値と文明研究: 朝鮮朝後期韓国の実学思想と民族宗教運動の公共性研究』、圓光大学宗教問題研究所・東京大学総合文化研究科(東京都・文京区)、2013年7月26日

[図書](計1件)

佐々充昭他、「近代韓国と日本の公共性構想(2)」(韓国語)、『朴光洙編、韓国学中央研究院出版部、2015年、228頁(147 - 176頁)』

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々 充昭 (SASSA, Mitsuaki)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号: 50411137

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者